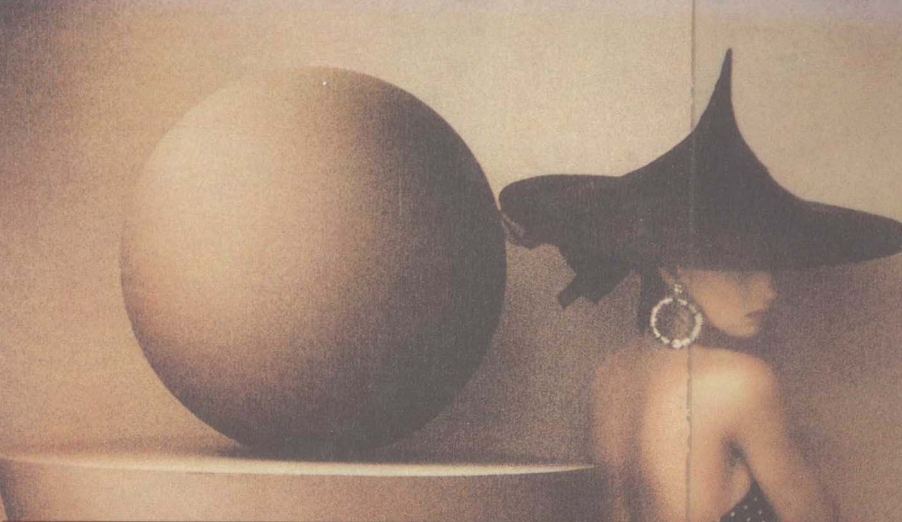
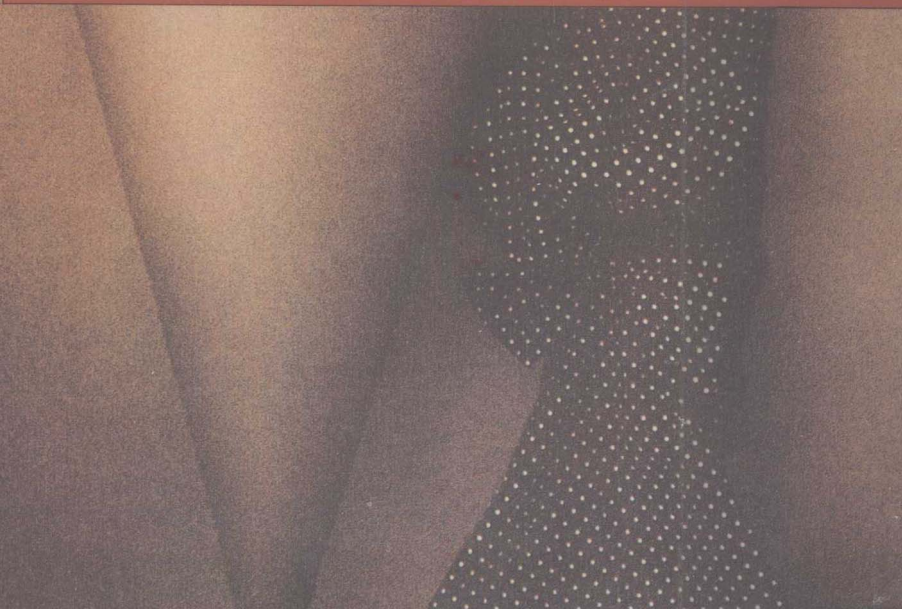




天使の恥部 [マヌエル・プイグ]

Pubis Angelical/Manuel Puig

安藤哲行訳



CONTEMPORARY
WRITERS



江苏工业学院图书馆

天使の恥部 マヨエ章・パイ
蔵書章

国書刊行会

天使の恥部

PUBIS ANGELICAL

1989年 8月31日初版第1刷発行

著者 マヌエル・プイグ

訳者 安藤哲行

カバーフォト シーラ・メッツナー

装幀・造本 坂川栄治(坂川事務所)

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社 国書刊行会

東京都豊島区巣鴨3-5-18 郵便番号=170

電話=03-917-8287 振替=東京5-65209

印刷所 ㈱キャップス+セイユウ写真印刷株式会社

製本所 田中製本印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

天使の恥部

第I部

カーテンのレースを通つて月の光が潜りこむ、その光を枕のサテンがたっぷり吸いこんでいる。新婦の手は黒髪のをばでのんきに掌を見せている。やすらかな眠りのようだった。

突然、その掌がひきつる。だが、ピンクやブルー、様々な色に化粧された完璧なまでに美しい顔は弛緩したまま。まもなく、世界一の美女は不安に怯えて上体を起こす。その顔に表情が戻る。長く弓なりになつてゐるために付けてゐるように見えるまつげが、大きく見開いた目に陰をおとす。夢の中で、でっぴり肥えた医者と出会つたところだった。礼服を着たその医者は山高帽を掛けると、白いゴム手袋をはめながら近づき、巨大な綿の塊の上に横たわつてゐる彼女の胸をメスで切り開く、すると――心臓ではなく――複雑な時計仕掛けが現れる。死の床についてゐるはずのその女は、病人ではなく、機械仕掛けの、それも壊れた人形だった。

悪夢が終わり、ほつとしたように深い溜息をつく。少しも怯えることはなかった。危険はいずれも想像上のものでしかなかった。まわりを見渡すと、薄暗い寝室の中にあるものすべてが目新しい。新婚初夜はまだ朝を迎えてはいなかったが、隣には誰もいない。手の近くに銀細工の柄の鏡があつた。口紅を塗つた唇が映る、ついさつき塗り直されたように見える。ほとんど何も思い

だせなかつた。覚えてゐるのは夫との乾杯、夫の灰色のこめかみ、それとも白だつたか、自分の一挙一動を眺めまわす単眼鏡、持ち方の分らない四角いグラス、冷たいネクター、それだけだつた。化粧が落ちていないのは、顔には敬意がはらわれたからだ。右手でからだに触つてみようと思ふが、手を伸ばしたとたん、引つ込める。そうしたことを調べるには右手ほど敏感でない左手のほうが適しているように思ひなおしたからだつた。鎖骨の少し上あたりに熱くなつてゐるところがあるのはすぐ分つた。片方の乳房に、三つか四つ、弓なりになつた齒形があつたが、もうほとんど痛みはない。ところが腹部には襲われたような痕跡はまったく残つてゐない。ただ、下腹部は確かに深く引き裂かれたせいで濡れ、火照つてゐた。

思ひだそうとしたが、脳裏に浮かんでは初めて口にする飲み物を飲んだときの口あたりのよさだけ。目でグラスを探してみたが、見つからない。歩いてみることにした。歩くと股間がいつそう火照る。ミンクの敷物から足の裏に暖かさが伝わってくる。花模様のレースのカーテンの向こうに、ヴェネツィアガラスが填め込まれた鉄の窓枠が透けて見える。カーテンを開けると、大きな窓には葉脈を形どつた円筒形の掛け金がかかつてゐる。びっくりさせられるようなデザインその重い掛け金をやつとのことで動かし、バルコニーから身を乗りだす。バルコニーの真下からは極めて長い矩形の水路がのびてゐるが、その先の方は闇と霧に消えてゐる。その両側に連なる並木の枝は微かな風にも抵抗できずに揺れ動いてゐる。大勢ゐる管理人の誰一人として視界に入らない。また、水面の吐きだす霧に偽装されて島の輪郭も見えない。突然、ランチのエンジン音が聞こえてきた。スターターは乾いた、しつかりした響きをあげたが、その音もまたたくまに遠ざかつた。

彼女は振り返つて室内を見た。木のベッドの背は彫刻がほどこされ様々な色で塗られてゐたが、

その上端は雲と天使たちが浮き彫りにされている。その一人がまるで魚のような奇妙な目つきで女主人を眺めまわしているみたいだった。彼女は彼女でその天使をじっと見つめる。天使は瞬きしたようだった。目蓋が下がり、また上がった、女主人はそんな気がした。誰かが覗いているのかしら？　そこで視線を落とすと、アーミンのスツールの上に言伝が置かれていた、「仕事で出かける。君に知らせなかったのは、言え、いてくれと説き伏せられてしまうからだ。君に睡眠薬を飲ませたのは、君に見つめられていると、それつきり何一つできないような気がしたからだ。君の美しさにはそれほど尻込みさせられるんだ！　身がすくむのではと不安だった、だからこそ、類稀な君の肉体、類稀な君の知性、この二つの挑戦を同時には受け入れられなかったのだ。愛してる」

数時間後、うっかり開け放しにしていたカーテンのあいだから日の光が射しこみ、その光に彼女はふたたび目覚めさせられた。何の説明も受けていなかった。どうやって召使を呼ぶのかしら？　押しボタンは見えない。だが、ダイヤルのない陶器の電話が金の脚の上に乗っている。受話口も送話口も金でできていた。すぐに年配の女性の声が応える。新しい女主人は時間を訊いた、一九三六年の春のある日の、もうすぐ午前八時。朝食を頼む、レモンティ、バターをつけずにカリカリに焼いたトースト。お部屋にお食事をお持ちすることはできません、朝食の別館、そう呼ばれておりますとところできちんとお給仕するようにとの旦那さまのお言い付けですと女は答える。下に降りていきたくないのと女主人はやり返す。奥様はウイーンでのご結婚式のあと、昨夜お着きになられたばかりで、お疲れのはずとのこと、旦那さまから奥様をおもてなしするようあれこれ事細かにお指図いただいておりますので、変更するわけにはまいりませんと女中は言い添えただけだった。妻に最高の喜びをもたらすよう、すべては夫の手で慎重に計画されている、そし

て、何か異議をはさめば夫をひどく侮辱することにもなりかねない。そんなふうに女中は仄めかしたのだ。

別館の丸屋根の上には小さな手摺がついていたが、奇抜で、一見してあまりいい印象を与えるものではなかった。灰色の大理石のポーチの上を見ると、そこにも、白い化粧漆喰でできた雲や聖女を取り囲む天使たちの姿があった。天使たちは聖女を讃え、護り、楽器を奏で、歌っている。魚の目をした天使はいなかった、女主人を見つめる天使もいない。続いて、席を選ぶ段になった、日向がよろしければバラ園の隅がございます、それとも……。女主人はすぐに同意した、バラ園がいいわ。召使はいずれもかなりの齢だと分った。やがて、紅茶が唇を濡らしたとたん、フルートとハープの音が叢から響きはじめる。隠れているのか目に見えないのか、そんな草上の楽師たちにと不安を和らげられたおかげで、席をたち、その島での最初の散歩に出かける気になった。島は平坦であり、周囲はわずか数キロ、一度足をのぼすだけで全体が見てまわれそうだった。島から逃げだすための一番簡単な方法もたやすく見つかるかもしれない。紅茶は渴きを癒してはいなかった。

庭園と水路の岸との境になっている鉄柵に近づくにつれて音楽は遠くなっていた。だが、まもなく、せかせかした足音が聞こえてきた。若そうな女中だった。「この屋敷で七十歳になっていないのは、あなただけ？」女中はそうですと答える。「じゃあ、どうしてそんな例外をつくったの？」奥様が急に遠くまでお散歩なさりたいとお思いになられましたとき、息切れしないでごいっしょでできる人間が必要だからですと女中は答えた。女主人が鉄柵に近寄る素振りをみせると、だしぬけに引き止める。「危ない！……」無礼はお赦しください、ですが、その鉄柵には電気が通っているものですから」鉄柵は長円形の島の周囲、その全域にわたって装飾文様——巨大な腕

と蛇——を繰り返している。島の他の建築物は十八世紀来のものだが、その鉄柵は最近になって作られている。女主人はこの鉄柵が嫌だった。平行線や檻に対して脅迫観念を抱き——なぜか分らないが——今世紀初頭のウィーンの芸術家たちの作品をずっと嫌ってきたのだ。平行に並んだ縦の鉄棒は蛇の姿になっており、一匹が鎌首を真上に持ち上げているとすれば、その隣の蛇は真下を向いている、いずれも怒り狂ったように口を開け、舌を突きだしている。一方、水平の鉄棒はごつごつした腕の連鎖となっており、互いにつかみあい、筋がピクピク動くほど力が入っているとはいえ、なげやりな様子のはつきり分る。そんな腕を蛇が刺し貫いているのだ。女主人は空を見上げた。そんな鉄柵はもう見ていられない。太陽の近く、奇妙な雲がただならぬ速さで姿を変えていく。まるで文字を、言伝を伝えようとするかのように。

女主人は散歩をきりあげ、何かに怯えるかのように、息せききって、屋敷へと走った。女中は大腿で走り、苦もなく後を追ひ、行手を阻むように彼女の前にまわる。女主人は苛々し、あの奇妙な雲をもう一度見た。言伝は自分宛に違いない。女中は半歩動き、頭でその雲を隠した。女主人は初めてその女中の顔を見つめた。眉は濃く黒い、じゃあ、目は？ 小鼻は女にしてはどつしりしすぎている。白粉を塗った肌は髭を剃りおえたばかりの男の肌ほども滑らかではない。「それから駄目でございます、素晴らしい女優でもあられます奥様、こちらが表玄関です」もう映画女優じゃないわと女主人は答える。「すみません、でもわたしはスクリーンに映る奥様をとっても讚美していたものですから。奥様が見事に主役をお果たしになられました映画を三本見せていただきました」そんな映画はもう存在していないのよ、夫がネガもコピーも燃やすように命じたから、だから、そんな映画のことを云々するのは嘘をつくことになるわね、なぜって、映画が存在した証拠をあげることとはどこの誰にもできないんだからと女主人は答える。女中はくいきが

る、「一本の映画が心に焼きついて離れないんです、奥様はその映画の中では別の女に化身する女性を演じられていましたが、二人とも時計仕掛けの心臓なんです」「そんなフィルムは存在しないわ」と女主人は真顔で答える、「そんな映画、撮られたためしはないわ、あなた、混同してるのね、そんなストーリー、初耳よ」女主人が見つめるのをやめたとき、女中は初めて地面から顔を上げ、その目を見せた。

朝の光を浴びた本館のファサードはにこやかだったが、それは筋立てのこみいった喜劇には恰好の背景幕とも言えた。女主人は苛々したように、なりふりかまわず、すすり泣いたが、涙は流れていない。実際、典型的なロココ風のファサードは気持ちよさそうにあたりの風景に溶けこみ、その黄色い平坦な壁からはドアと窓の白い框が突出し、三階建ての建物の最上階にあるバルコニーのまわりは雲を形どった白いレリーフになっていたが、その雲には別館よりも多くの天使たちが宙に浮いている。女主人は天使たちを一人、一人眺めた。自分を哀れんでくれたり庇護してくれたりするような表情の天使はいないかと思ひながら。天使たちはそのとき、空に筋をつけてのびていく、あの奇妙な、とはいえ、本物の雲を見てはいず、ただ、至福の面持ちを変えることなく互いに見つめあっていた。「善良な顔をしていない天使たちもいるものね？ それに……あなたの名前、まだ聞いてなかったわね」と女主人は不安を押し隠すように言った。天使は皆、善良です、そして、大義を守っています、でも、悪との戦いでは非情になるんですとテアは答える、「自分は善の味方と信じている人は天使たちを恐れる必要はありません」女主人は五段の階段を上って、本館のポーチに立つと電氣の流れている鉄柵の向こうにある棧橋を眺めた。テアは人差し指をのばして反対方向、北を指したが、そこにある鉄とガラスでできた風変わりな建物に女主人は度肝を抜かれた。「あれは温室です、奥様。中にお入りになれますと、この島にうまく根

づいた、見事な椰子がご覧いただけます」

女主人はようやく自分の部屋にたどりついたが、しばらく外に出ていただけで、すっかり疲れきっていた。もう雲の奇妙なエピソードは思いださなかった。ただ喉が渴いていた。孔雀石のテーブルの上にある四角いグラスにすぐ目をやる。銀細工の爪につかまれた宝石が——トルコ石が二つ三つ、アメジストが一つ、トパーズが何個か——そのグラスに填め込まれている、そして、厚いクリスタルの内側に入っている芳しい琥珀色の液体が容器の形をなぞっている。美味しい、爽やかな液体だが、形がない、そんな液体に四角いグラスが形を与える、と同時に、中に閉じ込めてもいる。女主人はその液体が哀れになり、ひとのみで自分のからだの一部にしてやる。甘い、爽やかな夢が女主人の目蓋に降りてくる。

ふたたび目を開けたときには夕暮れの薄闇が島に広がりはじめていた。青い血管が微かに透けて見える真つ白い腕を伸ばして電話の受話器をとる。テアを出してと言うと、「申し訳ございませんが、奥様、日暮れになりますと、このお屋敷の入口はどこも閉まります。温室へのお出かけは明日までお待ちいただかねばなりません。夜間、お庭をきっちり監視するのは難しいとのこと判断から、旦那様は奥様が暗い中をむやみにお散歩にお出かけにならないようにとお命じになりました」

何を言っても無駄だった。上体を起こすと、孔雀石のテーブルの上に、美味しそうな冷菜をのせた小皿が何枚か置かれているのが分った。その真ん中、小皿に取り囲まれるようにして四角いグラスと同じ作りの大きな壘が立っている。空腹に駆られて、急いでキャビアを、スモークサーモンを、プロヴァンス・ピスケットをつまみでは、この島で渴きを癒すことのできる唯一の飲み物をたっぷり飲む。すぐに、また、ほろ酔い気分になった。まわりを見渡した、まもなく、抗う

こともできずに眠りこんでしまうことは分っていた。そして、夜の不思議な時間が経過するあいだに、いったいどんな体験をするのかしらと思う。ベッドを見ないようにと気を集中した。天使たちの一人の敵意を抱いた視線とでくわすのが、結婚第一日目の最後に目にするのはその視線ということになるのが怖かったからだ。横になり、目蓋を合わせたが、眠りに落ちる直前、脳裏には、目蓋を下げ、そして、ふたたび上げる魚の目が鮮やかに浮かんだ。

「わたし、いままで自分がひとりぼっちだなんて思ったこともなかったのに」

「そりゃ、あたりまえよ。自分の国から遠くにいるんだし、メキシコはずいぶんちがうし。そういったことが影響しないはずないわ」

「そうじゃないの。わたし、以前は一人でいることが気にならなかった。それどころか、ブエノスアイレスを発つまでの何年か、わたしが望んでいたのはね、一人になることだったの」

「家に帰ると、あなたの言伝があつた。だから、飛んできたのよ」

「びっくりしないで、ベアトリス、たいしたことじゃないんだから」

「驚いちゃいけないけど。でも、急ぎの用って、いったい、なんなの？」

「たいしたことじゃないの。いいえ、そう、相談にのってほしかったの。ひどく気分が落ちこんだのよ、ここの医者たちが信用できなくなっちゃって。できたらほかのサナトリウムに替わりたいわ」

「アナ、そういったことは、よく考えないとね。ここで手術したんだから、あなたはもう、ここ

の医者の管轄よ」

「もちろん、あの人たちの言いなりよ」

「わたしが言いたいのはね、あなたの症例をいちばんよく知ってるのはこの医者だってこと」

「ほんとにごめんなさい、あわてて電話したりして。でもね、あのときは気が滅入って、取り乱してたの」

「どうして取り乱したりなんかしたの？」

「ベアトリス、みんな、わたしのことなんか気にかけてくれないの。ここは費用がかさむでしょ、まるでお情けって感じで、扱うのよ」

「まえはこんなに神経質じゃなかったわね。回復期なんだから気をたかぶらせちゃだめよ」

「じつはね、ここの看護婦はいつもせわしなくてね。わたしが呼んでも、一分だって暇なときはないのよ」

「……」

「ちつとも優しくしてくれないの」

「このごろは誰だって苛々してるわ、このひどい雨のせいで……。雨期はもう終わってていいはずなんです」

「そうなの？」

「たぶん、あなたもそう、この天気で気が滅入ってるのよ」

「去年、雨期みたいなのはもう体験した。雨で気が重くなるってことはないわ。それどころか、雨が降れば、のんびり部屋の中にいられる。わたししたら、このいまましい七五年って年が終わるまで降りつづいてほしいぐらいよ」

「……」

「しばらくいられる？ それとも、急いでる？」

「いいえ、アニータ、さつきも言ったけど、いっしょにいられるわ。でもね、あなた、わたしに話したいことがあるんでしょ、それなのに、回り道ばかりして」

「ベアトリス、時間をつぶさせて恥ずかしいわ、あなたみたいな忙しい人に。いままで迷惑かけたことなかったと思うんだけど」

「いっぺんに話してみて」

「それが簡単じゃなくて……。あなたの想像どおりだった。アルゼンチンから悪い知らせが来たの。でも、医者にも話さないといけないんだけど、あの医者はわたしをどう扱っていいかわからないみたい。だから顔を見せないのよ」

「……」

「毎日来るけど、すぐに行ってしまうし、なにを訊いてもぜんぜん答えてくれない。たとえば鎮痛剤のこと。毎晩、注射してくれるんだけど、なにかおかしい具合になるの、うまく作用してないんじゃないかな」

「それで、その医者はどう言ってるの？」

「鎮痛剤を止めてください、痛みが出るのを待つて注射してください、そう言っただけ。どうしてこんなに鎮痛剤がいるのかって……。すると、その返事がね、遅効性のものはこれしかない、痛むまで待つていたら即効性の鎮痛剤を使わなくちゃならなくなる、その薬にはまた別の悪い副作用がある、そう言うのよ」

「もつともな話じゃない？」